

生涯学習における英語の習得

島岡 丘

はじめに

本稿では学校教育とは別に一般市民が生涯教育として英語を学ぶ場合を取り上げる。特に英語を選んだのは、21世紀は英語が世界で最も広くまた最も重要な言語として位置づけられていること、また筆者の専門分野が英語であるという理由による。

外国語の習得はピアノの練習とよく比較される。ピアノを習う人は多いが、途中で諦めてしまうことが多い。また、楽譜を見てピアノが一応弾けるようになった人でもしばらく練習をしないとダメになってしまうことが多い。途中で止めてしまうとそれまでの学習が無駄になってしまうので、なるべくならそのような状況を生み出たくないものである。

英語を学校教育で受けてからしばらく英語に関係のない実務につき、数年経ってしまい、また、社会的必要性から英語の学習を再開してみたいと思っている人を対象に論を進めることにする。

ことばの本質とその誤解

ことばの本質は音声であることは古今東西の言語学者が指摘する。しかし、日本は漢字文化圏であり、視覚文化が発達してきた伝統があるために、文字さえ読めるようになればよいという風潮が強い傾向がある。21世紀ではこのような文字偏重は口頭重視の国際社会では日本全体としてもマイナスである。言語生活のかなりの部分は音声で行われる。国際貢献ということばをよく耳にするが、まずその糸口は音声による伝達活動である。中学・高校でこの面が疎かにされがちだったのは上級学校の進学はペーパーテストでよい点を取ればよいという目先の手段として語学をやる傾向が強かったからである。この考え方に問題があることは立場を変えてみれば明らかである。出題者側では英語力のあるもの、また将来、英語で口頭発表できる基礎力のあるものを合格させたいと思って出題するわけであり、たとえペーパーテストであっても音声言語を視野に入れている。

英語を習得する方法

英語を再学習しようとする人たちは、「まずABCから」とよく言うようだ。しかし、ABCは周知の通り、アルファベット26文字の最初の3文字である。前項で述べたようにことばの学習は音声の学習であるから、文字を先に覚えるのではなくて音声をまず習得すべきなのである。そのためには対立的

配列を主眼とするアルファベット26文字を覚えるよりも、文字と音声との規則性を第一に考えるべきであろう。

そこで、まず共通する母音を持つアルファベット文字を集めてみると次のようになる。

/i:/	E; P, B, V; T, D; C, G, Z
/éi/	A, H, J, K
/óu/	O
/ái/	I, Y
/u:/	U, Q, W
/e/	F, S; M, N; L, X
/a:r/	R

以上で明らかなように英語の母音体系が容易に見られないこと、名称音だけではすべての英語の母音を表していないこと、子音もすべて名称音にはないことである。つまり、文字以外に何らかの音声記号がなければ、英語の音声習得は不十分であることが実証されたわけである。

音声表記は1音1文字の規則性があることが望ましい。日本語では、カタカナの助詞「ハ」が[wa]に、同じく助詞「へ」が[e]になること以外は規則的に音声と文字が一致しているので、カナ文字を音声表記として活用することができる。しかし、英語の場合はアルファベット文字のほかに発音記号が必要であり、それはIPA(後述)が最も適当として用いられてきた。しかし、再学習者はIPAの解釈が正しくできない場合もあり、その解釈を容易にするために近似カナ表記を用いることを筆者は提唱している。

英語習得上の問題点の発見

一般に学習とか習得の順序は既知情報から未知情報へということになっている。日本人は日本語を世界一よく知っているわけであるから、日本語を最大限活用し英語の音声体系に迫るのがよい。また、偶発的学習(incidental learning)においても反復され既知情報となっている英語は手がかりとして利用するのが賢明であろう。そして、もし日本語にない英語特有の音はそれを聞き取りまた発音できるような有力なプログラムと処方箋を用意すべきである。ここでは偶発的学習も含めた日英語の比較から英語習得上の問題点を発見してみたい。ここで取り上げるのは、よくテレビのコマーシャルに出てくるDrive your dreams.である。わずかこの3語の中に英語の特徴がかなり多く含まれていると思われる。

その特徴1. 強弱拍子

Drive your Dreams.は日本語では「あなたの夢を乗せてドライブしましょう」ということになるが、カタカナでは「ドライブ ヨア ドリームズ」のようにしか表すことができない。しかし、カタカナ通り発音すると英語とは似ても似つかぬ音連続になってしまう。その原因は英語は強弱拍子の言語であり、yourのような人称代名詞は極端に弱く早く発音されるからである。

その特徴2. 音節構造 — 子音連結と閉音節構造

さらに音節についていえば、英語には子音と子音が結びつくいわゆる子音連結 (consonant cluster) があり、dとrとの間には母音介入 (epenthesis) がないことである。日本語は音節の終わりには必ず母音が来るいわゆる開音節構造であるが、英語ではdriveのように子音のvで終わる閉音節、また、dreamsのように子音連結の[mz]で終わる閉音節がある。

その特徴3. 日本語にない音素

次に個々の音については、まず、英語のrは日本語をローマ字化したr音と異なること、また、英語のrは発音する際、舌が口蓋のどこにも付かないので、接触—開放の動きが見られないのである。

また、driveの音節末に生じる有声唇歯摩擦音vは日本語には存在しない音である。しかし、有声両唇閉鎖音のbと区別する必要性から、「ヴ」という文字を使うようになった。しかし、fに対する表記、さらにlやr、有声音または無声音のthをカナで表すことができないかを検討する必要がある。

その特徴4. 綴り字と発音のずれ

driveの最後のeは発音されない黙字である。しかしその黙字の存在は重要で黙字の前の母音字はアルファベットの呼称 (naming sound) で発音する。一方、dreamsのeaは[i:]と発音されることが多いが、greatは [éi], headは [e] などのようにも発音される。綴り字だけを頼りにすると、それはちょうど、未知な漢字を振り仮名なしで発音を試みるようなもので、自信のある発音が出しにくい。

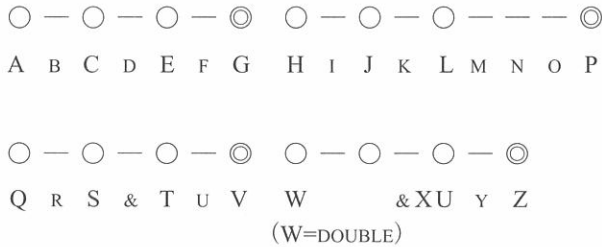
その特徴5. 英語特有の音声特徴

英語ではIPA (国際音標文字) で表せない特徴がいくつかある。英語を英語として使おうという意欲を持っている学習者にはこの点も考慮する必要がある。筆者はIPAにいくつかの付加記号 (diagraph) を加えることでより英語らしい音を出す手がかりが得られるのではないかと思っている。それらをまとめてIPA+(後述) と呼ぶことにする。

以上5つの問題点を指摘したが、以下はこれらの問題点をどう克服するかを検討する。

強弱拍子の習得

どの言語にもリズムがあり、英語の場合は強弱拍子のリズム (stress-timed rhythm) である。その特徴は強勢の伴う音節がほぼ等間隔で現れるということで、途中に弱く発音する音節の数に関係なく、等時性が保たれるということである。4拍リズムを例にして、以下の例を音読すると英語の強勢拍子のリズムが体感できる (大きい文字を強勢ある音節、小さい文字を強勢のない音節とする)。



強弱拍子の特徴は2音節以上の単語を言うときにも現れる。例えば, Bradford, Oxford, informationなどのorの発音は綴り字とは異なり, すべて弱音化して, [fəd] (アメリカ英語では[fərd])のようになる。

日本で発売されている英和辞典または英英和辞典ではほとんど, Bradfordは[brædfərd]のようにアクセントのある母音の上に表記している。しかし, 英米で出版されている発音辞典はすべて音節の前に短い垂直線で示している。それぞれの利点を考えてみると音節の前に印をつけると, 音節の切れ目が明らかになるだけではなくてアクセントのある母音の前の子音も強く発音されることを示すという利点がある。一方, 母音の上に左下がりのアクセント符号は右手を左下方向に下げるのは最も力が入るので, 強勢アクセントを示すのは実感を伴って良い。またスペースが半角だけ助かるという利点もある。要するに, 記号をどう解釈するかが問題なのである。

音節構造

—子音連結と閉音節構造の習得

dr-またはtr-は日本語にない音節構造であるため, 日本語を母語とするEFL学習者は途中で母音を入れて, dryを「ドライ」のように, tryを「トライ」のように発音してしまう。これを防ぐにはたとえ, 舌先音と, 舌葉音の差があるにしても, dryを「チュアイ dʒwái], tryを「チュアイ dʃwái]のように表記すれば, 少なくとも母音介入を防ぎ, より英語らしい音を出すことができる。

また, 語末または音節末の閉鎖音については, 約束事として, もし, カナ表記文字が普通のサイズよりも2割小さい場合は母音を付けずに発音し, 時には未開放破裂音になること決めておけばよいのであって, カナ文字は常に母音を音節末尾に付けることを強調する必要はないと思う。

綴り字と発音のずれの習得

IPAの発音記号は英和辞典の見出し語に常に付いており, IPAを正しく解釈できれば, 例え綴り字が複雑でも発音の手がかりが得られる。しかし, 英語の学習を中断などしたために, IPAを読み取ることができなくなった学習者のためには, それを読み取る手段を与えなければならない。筆者はこれを近似カナ表記と呼び数年前から実際に使い喜ばれている。例えば次のように約束している。

母音について

hat, Japanなどのaにあたる[æ]の発音を「エア」で示す。

bird, thirdなどのirにあたる[ɜ:r]の発音を「エァ〜」で示す。

bus, cutなどのuにあたる[ʌ]の発音を「ッァ」で示す。

hot, lotなどのoにあたる[a]を「*ァ」で示す。

子音について

light, mileなどの[l]にあたる発音をそれぞれ、「スル」, 「ウ」で示す。

right, carなどの[r]にあたる発音をそれぞれ, 「ウル」, 「ァ」(英音では略)で示す。

mouth, batheなどのthに当たる発音をそれぞれ, 「ス」, 「ス」のようにやや小さく示す。

five, wifeなどのfにあたる発音を, 「ヴ」の連想で, 「ウ°」で示す。

one, singなどの語末の発音 [n], [ŋ] をそれぞれ, 「ンス」, 「ンッ」で示す。

英語特有の音声特徴

IPAの表記は世界の諸言語を共通の記号で示そうという動機からでき上がっているもので、英語の特徴をよく捉えていないところがある。そこで、筆者はIPA+という一連の付加記号をつけて英語らしさに近づけている。

IPA+は次の通りである。

- | | |
|-----------------------------|------------------------------------------|
| ① 二重母音にアクセント記号付与 | 例:name[néim], game[géim] |
| ② 音節頭の無声破裂音に帯気音の印 | 例:pen[pʰen], time[tʰáim] |
| ③ 破裂音が未開放音になるときは印す | 例:notebook[nóut˘bɔk] |
| ④ 音節の切れ目を必要に応じ印す | 例:English[íŋ · glɪ], between[bɪ · twi:n] |
| ⑤ 語末子音と後続語の(半)母音とつなぎ | 例:an˘apple, one˘another |
| ⑥ [i]の代わりに[ɪ], [u:]の代わりに[u] | 例:olive[áɪ.lɪv], look[luk] |
| ⑦ 必要に応じてカナ表記で支援 | 例:trauma[tráumə, tʃwáu- チュアウマ] |

IPA+によって英語らしい発音の手がかりが得られたと思う。もう一つ再学習で必要なのは英英辞典または英英和辞典の有効利用である。この問題を次項で取り上げる。

英英(和)辞典の有効利用

再学習者の目標は英字新聞が自由に読め、英語を駆使して自由にコミュニケーションできるということであろう。この目標を達成するには音声文法意味の3分野を再学習する必要がある。音声については前段までに述べたように近似カナ表記を加味することで、日本語から誰でも出せる英語音が可能になる。文法については中学の教科書の文法・文型一覧、とか英和辞典に付録的に付いている文型一覧などを見ることで基本的なことは比較的容易に習得できる。英語にはイディオム的な表現が多いので、やはり辞典を引いて覚えることが必要である。

われわれはつい便利がいいので、訳語が載っている英和辞典を引いてしまいがちである。しかし、あまりに便利が良すぎはしないだろうか。英語の語彙項目それぞれが持つ語のニュアンスや他の語との関連などを知り、われわれの想像力を刺激してくれるのは英英(和)辞典である。具体例をあげてみ

よう。wimpということばが分からないとする。英和辞典派と英英(和)辞典派は次のような結果になる。

英和辞典派:wimp 弱虫, 意気地なし

英英(和)辞典派:wimp a weak person who has no courage or confidence→弱虫

つまり, 英英辞典を活用すると, 定義がはっきりすること, また定義文の中に関連のある語が出てくること, さらに日本語の訳は自然に思い浮かぶという利点がある。面倒であるという欠点はむしろ時間をかけることで意味理解が深まるのではないだろうか。定義が分かりにくいという人は英英和辞典を使うことを薦めたい。

まとめ

英語の学習を途中で止めてしまい, 諦めかかった人が英語の学習を再開する場合, どのような方法があるかという命題を取り上げて検討した。音声習得は日本人が豊かに持っている視覚文化を活用し, 発音記号を活用すれば不規則な英語の文章を英語らしく読める可能性を述べた。さらに英語らしさを出すにはIPA (International Phonetic Alphabet) に7つの要素を加えたIPA+を活用するとさらに楽に英語らしさを出すことができることを述べた。さらに, 辞書は便利すぎる英和辞典を使わず, 英英辞典または英英和辞典を使って定義文を読み, 各語彙項目が持っている語彙のニュアンスを理解し, 日本語の適訳が自然に浮かび上がるような学習法を生涯教育としての英語習得法として位置づけた。

参考文献

- Bloomfield, L. (1933, 1984) *Language*. Chicago.
- Roach, P. (1997) *The Daniel Jones English Pronouncing Dictionary*. CUP.
- Roach, P. (2001) *English Phonetics and Phonology*. 3rd edition. CUP.
- 島岡丘ほか(2002)『ワードパワー英英和辞典』増進会.
- 英語発音表記学会(2002)『英語の発音と表記』No.3. いばらき印刷.
- 島岡丘(2002)『カタカナで完全マスター英会話』丸善.
- Wells, J.C. (2000) *Longman Pronunciation Dictionary*. Longman.